

では、**マタイの福音書 17 章 1 節から 8 節**を今朝のテキストにしたいと思います。まずは**1～8 節**を冒頭に通してお読みいたします。『<sup>1</sup>それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。<sup>2</sup>そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。<sup>3</sup>しかも、モーセとエリヤが現われてイエスと話し合っているではないか。<sup>4</sup>すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、素晴らしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」<sup>5</sup>彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声が出た。<sup>6</sup>弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。<sup>7</sup>すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない。」と言われた。<sup>8</sup>それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。』

今読んだところを是非文脈で理解して頂きたいと思います。文脈というとその前の内容です。**17 章**の前は勿論**16 章**であります。で、今は**16 章 21 節**のところを目を留めて欲しいと思います。そこにはイエス・キリストがまだ十字架刑にされる前です。弟子たちに対して「これから私はエルサレムに行って、十字架刑にされ死にます。」と。ただし、3 日目に甦よみがえりますということを予あらかじめ宣告しました。これは預言であります。弟子たちはその言葉を聞いて、非常に困惑しました。混乱したんです。自分たちの愛する、尊敬する主が、これから十字架刑にされて殺されてしまうなんて。死ぬなんて話は物騒だ、縁起でもない。彼らは縁起でもないなんて言葉は使わなかったと思いますが、いずれにしてもちょっとブルーになってしまったわけです。イエスは、十字架刑にされて死ぬけれども 3 日目に甦るとまで言っているんですが、どうも 3 日目に甦るという部分だけは彼らの脳裏からは消え失せていたように思います。どうしても最悪の死に方をする。非業の最期を遂げる。その部分だけがあまりにも耳に響いて、そこだけが強調されてしまって、彼らは困惑し、混乱し、そして非常に落ち込んでしまいました。そんなイエスをペテロは、(これは弟子の筆頭です。ペテロは 12 弟子の筆頭、リーダーという形で) イエスをいさめようとし、それが**22 節**に書いてあります。「そんな否定的なことを口にしてはいけませんよ。」みたいな。「そんなネガティブなことばかり言うてはいけません。」と。「もっとポジティブにならないといけませんよ。」師匠をいさめようとしています。「そんな弱気では、弱音では、私たち弟子たちの士気が落ちます。」そんなことをペテロは代表格のようにして進言したかのように思えます。弟子たちは一様にイエスの言葉に混乱し、そして落ち込んでおります。その文脈を思い出して欲しいと思います。その前にはペテロは、「イエスキリストが生ける神の子キリストである。」と素晴らしい信仰告白をしていたわけです。それが先月の内容でありましたけれども、その直後の出来事です。ペテロのその信仰告白の上に、イエスは「私の教会を建てよ。」とおっしゃいました。その信仰告白については**16 章 16 節**の部分「あなたは、生ける神の御子キリストです。」で、イエスはそれに対して**18 節**では「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に(その信仰告白の上に)わたしの教会を建てます。」と。ペテロとイエスは素晴らしい会話を既にしたわけですが、でもそのすぐ直後に今度はペテロとイエスの間では、暗雲が立ち込める様な非常に暗い、弟子たちも一様に落ち込んでしまうような、そんな雰囲気ガラッと変わって襲ってきたわけです。

で、そのような落ち込んでいる弟子たちに対して、皆さんもどうでしょうか。今朝落ち込んでいる人がこの中にいるでしょうか。「今日はどうもブルーです。」と。「今私は困惑しています。混乱しています。」

という人がいるでしょうか。是非その人に今朝用意されたこの神の言葉をプレゼントしたいと思います。**16章28節**のところに今度は目を留めて欲しいと思います。聖書は文脈で理解するというので、その文脈で**16章**の最後の言葉です。『まことに、あなたがたに告げます。(その困惑して、落ち込んでいる弟子たちに言いました。)ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々があります。』これは、12使徒たちの中で、人の子が(これはイエス・キリストのことです。御国というのは神の王国、天国のことでもあります。)その人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいますと。ここだけ読んでしまうととてもあり得ないと。そんな弟子なんかいたはずがないと、多くの人はこの箇所を難解だというふうに考えてしまうんですけども、でも聖書は文脈で理解するという話をしましたので、当然文脈はその次であります。**17章**です。**16章28節**の「人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々」とは一体誰なのか。そんな弟子は本当にいたのか。その答えこそが**17章**にあります。ですから**16章**は、本来は**27節**で区切るべきだと思います。章と節というのは、これはもともとあったものではありません。聖書の言葉はすべて神の靈感によって書かれたものですが、章と節のこの分け方というのは元々あったオリジナルではありませんので、これは神の靈感と言うよりも、人間の便宜上。章と節があることでサッと聖書を開くことができるということで、便宜上付けたものです。必ずしも神の靈感によるものではありませんので、できれば**16章27節**で切って、**28節**はむしろ**17章**に組み込むべきだというふうに文脈では捉えることができます。そういうことが何故言えるかということ、その根拠もお話したいと思うんですが、ひとつにこの**17章**の出来事は福音書の中では**マルコの福音書の9章2～8節**にも並行記事として記録されております。これは後で開いて頂きたいと思います。家に帰ってから結構ですので、今は参考までにメモだけして頂ければと思います。そして**ルカの福音書の9章28～37節**にも全く同じ物語が、**マタイの17章**と同じ物語が並行記事として記録されております。特に**マルコの福音書の9章**の方を見て頂くと、むしろ**マタイの16章27節**で**16章**は切るべきだと。そして**16章28節**の方は**マタイの17章**の方につなげるべきだということが分かると思いますので、そちらはご自身で読んで確認してみてください。いずれにしてもこの**マタイの17章**は今読んだように3人の弟子たち、ペテロとヤコブとそしてヨハネ、その彼らがイエスと、そしてイエスの御国の栄光を見るところであります。ですから、「人の子が御国とともに来るのを見る」というのは、まさにその3人のことです。ペテロとヤコブとヨハネ、彼らは勿論**17章**においては死を味わってはおりません。ですからここで言う「人の子が御国とともに来る」その姿というのは、**17章**でイエスが見せる姿であります。それを実際にペテロとヤコブとヨハネという3人の弟子が、死を味わう前に見たわけです。

で、**1節**のところに『それから六日たって』とあります。**16章**と**17章**の間には6日のインターバルがあるということが分かります。ただし、この並行記事として**ルカ9章**の方も先ほど取り上げましたが、**ルカ9章28節**の方には矛盾したことが書いてあります。『これらの教えがあつてから八日ほどして』と**ルカ9章28節**にはあります。マタイの方は『六日たって』、ルカの方は『八日たって』。不正確だと。並行記事としては日数が異なっているではないか。ある人たちは、だいたいこれはアバウトなんですと。6と8の間をとって7。大体1週間ぐらいのことを言おうとして、六日、八日。そんなふうな理解もありますけれども、ただ**ルカ9章28節**の続きを読んで頂くと、その2日のインターバルは一体何なのか分かります。ただの矛盾ではありません。これは祈るために山に登られたと続きがありますので、その2日のギャップ、インターバルは、イエスは祈るために費やしたということが分かります。これは並行記事を読み比べることによって見えてくる素晴らしい事実であります。イエスは高い山、これはおそらくはヘルモン山という山であります。そこに3人の弟子、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて行ったんですが、そこで、その山頂で御姿がガラッと変わった。輝いて、そして後で説明しますが、変貌した、または変容したという、これこそがイエス・キリストの本当のお姿、栄光のキリストの姿であります。ただその前にイエスは二日

間、祈りのために時間を費やしました。何のために祈ったのかは、このことのためです。ご自身の姿が栄光に輝く、一瞬ではありますけれども変貌する。このことのためにイエスは二日間まるまる祈りにささげたというふうに考えられます。

では、なぜイエスは12人もいる弟子の中でわざわざ3人だけを、ペテロとヤコブとヨハネだけを選んだのか。まあ、<sup>うちでし</sup>内弟子というふうに見る人もいます。イエスの側近中の側近だと。門下生の中で一番優れているのを、よく<sup>さんぼうがらす</sup>三羽鳥なんて日本語でも言いますが、でも勘違いしないで下さい。この3人は特別優秀な優等生、三羽鳥ではありません。彼らはその逆であります。特別に問題がある3人。私はよく分かります。というのは、私は問題児だったので、大体いつも生活指導の先生が<sup>そば</sup>側にいました。学年主任だとか、生活指導の先生だとか、学校で1番怖いと思われる先生は、いつも私の側にいました。なぜくっついてくるのかと思ったんですけども、近くに置かれるものです。問題児は常に先生の近くに置かれるものです。それは今となっては有り難いことですが、ここでそれ以上の意味があるということもお話したいと思います。実はイエスがこの3人だけを、ペテロとヤコブとヨハネだけをお連れになって、ある特別なことをなさる。そしてそれを彼ら3人だけに見せる。そのような記事が実は聖書の中に3回記録されています。で、その3回の場面はすべて死にまつわる出来事であります。3回とも死にまつわる記事があります。で、その3回を今簡単にさらっと紹介しておきたいと思います。1つはユダヤ教の会堂、これは私たちが言うところの教会のようなものですが、その会堂を管理している会堂管理者ヤイロという人の娘。彼女は12歳でした。この12歳の娘が死んでしまったんですけども、その娘をイエス・キリストが生きかえらせるという奇跡があります。その時にもイエスは、ペテロとヤコブとヨハネの3人だけをお連れになりました。で、次はこの**マタイの17章**の出来事ですけども、3回あると言いました。で、その3回目というのがゲッセマネの園というところでイエスはやはりそこを祈り場としておりました。それは十字架刑にされる前夜の話であります。このゲッセマネという園。意味は油絞りの園。まさに油を絞られるような思いをしてイエス・キリストはそこで祈りをささげられます。オリーブの木の園であります。そこで「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」(マタイ 26:39) これは聖書の中で祈りの真髄と呼ばれるイエス・キリストの祈りですが、その時にこの祈りを聞いていたのは、やはりペテロとヤコブとヨハネの3人だけでありました。この出来事にもやはり死が関わっております。次の日にイエスは十字架刑にされるということです。杯と言うのは十字架刑の死を指しているわけですが、先ほどの会堂管理者のヤイロという人の12歳の娘を、これは一人娘でしたけれども、イエス・キリストが生きかえらせた奇跡、それによってイエスはご自身のことを死に打ち勝つ方として、この3人にお見せになりました。イエス・キリストは死に打ち勝つ方。で、ゲッセマネの園での祈りにおいては、イエスは死に従った方であるということ、この3人に証しされました。ヤイロの娘のケースでは、イエスは死に打ち勝つ方、これを強調されました。で、ゲッセマネの園では、イエスは死に従われたお方である、ということをお示しになりました。じゃあ、その間にあるこの**マタイの17章**の出来事は、一体何を教えようとしていたのか。何を示そうと、証しされようとしているのか。それはイエスが死ぬことによって栄光を受けるお方であるということ、この3人に特別に、ペテロとヤコブとヨハネにお示しになろうとしました。イエスは死ぬことによって栄光を受ける方、これはもちろん十字架による栄光のことを指しております。すべて3回とも死にまつわる出来事でしたが、ペテロとヤコブとヨハネは実はこの死に関して特別な啓示を、ユニークな教えを受ける必要がありました。ただの問題児という話ではありません。何故なのかと言いますと、この3人ともそれぞれがとても変わったユニークな死に方をするからです。まずペテロですが、最初に自分の死に様を知らされる弟子でもありました。イエス・キリストがペテロに対して、あなたはどのように死ぬのかということをお示しされました。詳しい事はヨハネの福音書 21:17~18 に書かれてい

ます。『<sup>17</sup>イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか。」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいつさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。<sup>18</sup>まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。』」イエスは、ペテロが<sup>あらかじ</sup>予めどのような死に方をされるのかということをお告げになりました。キリスト教の伝承では、ペテロは逆さ十字架刑によって死んだというふうに記録しています。聖書にはその事は書いてありませんが、ただ間違いなくペテロは捕らえられて、そして処刑をされる。そういう死に方をすることが、イエスの口から告げられております。逆さに十字架刑にされて死にました。

で、ヤコブは、これは最初に殉教した弟子として、彼の死については聖書の中に記録されております。**使徒の働き 12:1~2**にヤコブがやはり処刑された、殉教したということが書かれております。『<sup>1</sup>そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、<sup>2</sup>ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。』ヘロデ・アグリッパ1世と言う王様によって、ヤコブは殉教します。伝承によれば、ノコギリで縦に真っ二つに切られて処刑されたというふうに言われております。

で、残るヨハネについてはどうでしょうか。このヨハネは十二使徒の中では最後に死んだ弟子であります。ペテロは最初に自分の死に様を知らされる弟子で、ヤコブは最初に殉教した弟子、そしてヨハネは最後に死ぬ、最後に殉教する弟子であります。興味深いですね。まあ、どのような死に方をするかというと、まずはローマ皇帝、時の皇帝はドミティアヌスありました。捕らえられて、そして沸騰した油釜に投げ入れられたと伝承は残しております。ところが奇跡的にヨハネは死にませんでしたので、皇帝ドミティアヌスはどのようにしたらいいのかもう分からなくて、とにかく自分から最も遠いところに、それがパトモス島という島であります。岩がゴツゴツした全く<sup>ひとけ</sup>人気のない寂しいところです。そこにとにかく流刑として島流しにする。自分から一番遠ざけて、そこで神に見捨てられたようなところで、そのまま静かに殺そうというふうに考えたわけですが、しかしヨハネはそこでも死にませんでした。結局ドミティアヌスも死んで、そして歴代の皇帝たちはその間変わりましたが、結局ヨハネはそこからもう一度脱することができて、そして晩年はエペソという町、今日のトルコで過ごしたと言われています。90歳ぐらいになったヨハネは、その間は本当に隔離された環境の中で、それでも黙示録といった聖書の一番最後を飾る書を、そのパトモス島の島流しの間に啓示を受けて記したとも言われています。

そのようにして3人の弟子たちの姿を見る時に、私たちがこれから先に起こること、将来のために神様の方でユニークな特別な啓示を、教えを受けることがあるということを知って欲しいと思います。「将来先行きが不安です。これから一体どうなるのか分かりません。」まあ、自分の死のことも考え始めることも、年齢的にも、又は体調が不調になってくると考えることも多くなってくると思いますが、神様はこのような礼拝の時、教会の集会や、又は聖書の学びの時や、又はクリスチャンの書物であったり、又は友人たちなどを通して、彼らを用いて、そして将来のためにあなたを整えようとされる。そのような神様の扱い、働きということも知って欲しいと思います。ペテロとヤコブとヨハネは、そのような特別な取り扱いを受けました。将来のために主は何か私たちにも備えて下さいます。

で、次に**2節**の方を見て欲しいと思いますが、いよいよイエスの姿が変わるといところです。『そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。』この“変わる”という言葉は、ギリシャ語で“メタルフォー”と言います。皆さんのお手元にある週報の方にもそのギリシャ語は紹介してあります。“メタルフォー”これは質的な、内的な劇的な変化のことを指す言葉です。これをキリスト教用語では「キリストの変貌」これは高い山、ヘルモン山の上で起こった事なので「山上の

変貌」などとも言います。または「キリストの変容」なんていう言葉もあります。ギリシャ正教会、又はローマカトリック、聖公会などでは、この「キリストの変容」をお祝いする祝日も設けられております。多分 8 月頃だったと思いますが、プロテスタントではなかなかこれを記念日として覚えるということはありませんけれども、特別な時である事は間違いありません。イエス・キリストの姿が“メタルフォー”した。で、この“メタルフォー”という言葉は、実は興味深いことに英語の単語の語源ともなっています。“メタルフォーシス”という言葉がありますが、それは生物学用語では『変体』と言います。“へんたい”と聞くとすぐに皆さんが連想されるのは“変態性欲”の“エッチ”の変態だと思います。実際に“エッチ”というのは変態をローマ字で書くと、H の頭文字です。そこから取られておりますので、これも皆さんの週報には少し書いておきました。でも、そっちの“変態”ではありません。生物学用語の『変体』と言うのは、例えば週報にもあるように、芋虫がさなぎになって、そして想像もつかないような美しい姿、蝶に変わる。または水の中に住んでいるヤゴが、ある時水から出てトンボになる。驚くような変貌ぶりです。いろいろな生き物を皆さん想像できると思います。オタマジャクシからカエルも、これもやはり変体と言います。いずれにしましても、そのような劇的な、かつてのものとは全く似ても似つかない、想像もつかないような素晴らしいものに変えられる。これが変体、そしてギリシャ語で言うところの“メタルフォー”という言葉であります。イエスの姿は“メタルフォー”したわけです。変貌した、変容した、様変わり、変身したと言っても良いと思います。

で、実は変身したと言いましたけれども、でもそれは実は不正確な表現と言って良いと思います。イエス姿が変貌したことを、これは素晴らしい奇跡だと評価する人もいますが、実はこれは奇跡でも何でもないと私は思います。と言いますのはイエスはこの時凡そもう 33 歳ぐらいです。30 年以上は少なくとも本当の姿を隠してきました。実はイエスの本当の姿とは、神であります。神が人の姿をとってこの世に降ってきて、赤子として誕生したのが今から 2000 年前のクリスマスの出来事ですが、それ以前は勿論イエスとは名乗っておりませんでした。神の子。そしてその神の子の本当の姿は、黙示録 1 : 13~16 にも書かれておりますので、こちらは今私の方で読み上げたいと思いますので聞いて頂きたいと思います。ここにイエス・キリストの本当の姿が記録されています。『<sup>13</sup> それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。(この“人の子のような方”とはイエス・キリストのことです。)<sup>14</sup> その頭と髪は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。<sup>15</sup> その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。<sup>16</sup> また、右手には七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。』特にこの『顔は強く照り輝く太陽のようであった。』という描写は、まさに今私たちが読んだマタイの福音書 17 : 2 に書かれている通りであります。ですからこれが実はイエス・キリストの本当の姿です。神の御子としての真の姿です。正体です。王の王、主の主としてのイエス・キリスト。栄光の主とも言います。ですから一瞬ヘルモン山の山頂でその御姿が光輝いた。これが奇跡だと言うよりも、その本当の姿を 30 年間も隠してきたというか、その光を遮ってきたことの方が実は驚くべき奇跡だと言って良いと思います。輝いたのが奇跡ではなくて、輝かないようにしていたことの方がもっと大きな奇跡だということを皆さんにも捉えて欲しいと思います。実は御顔が太陽のように、顔が太陽のように照り輝くという話は、ここが初めての話ではありません。皆さんがよく知っているモーセも、実はシナイ山と言うところで神の 10 の言葉、いわゆる十戒を受けた時も、その顔が輝いたということが聖書に記録されています。モーセの顔の肌は光を放ったとそこに書かれております。ただ、時が経つにつれて彼の顔の輝きは、だんだん薄れて陰ってきて、そして消え失せていきました。この話については新約聖書の第二コリント 3 : 13 にパウロという人がコメントを残しています。こちらもお読みしますので聞いて下さい。『そして、モーセが、消えうせるものの最後をイスラエルの人々に見せないように、顔におおいを掛けたようなことはしません。』最初はあ

まりにも輝いていたので人々はちょっとびっくりして、驚いて、怖がったわけです。人々を怖がらせないようにモーセは覆面をしたんでしょうか。輝きを抑えるように覆いをかけたんでしょうか、謙遜さから。でも、そうではないということをパウロは言っています。むしろモーセの顔は段々その輝きを失っていったので、それがバレないように、人々をがっかりさせないように、敢えて覆面をした、覆いを着けたと言っているわけです。後でもう一度今読んだところはお読みしたいと思いますので、心に留めておいて下さい。モーセというのは、律法を代表する人物であります。その律法を代表するモーセの栄光は、消え失せる栄光であるということがここから教えられる。なぜならば、モーセの栄光は、これは反射した栄光だからです。反射された栄光、これは月明かりのようなものです。英語で言えば **reflect glory** といったものです。その一方で、イエスの栄光。まるで太陽のように御顔が輝いたとあります。これは反射ではありません。太陽ですから、月ではなくて、これはむしろ直接放射する栄光です。**radiate glory**、これは太陽光です。モーセの輝きは月光と見て頂ければと思います。それは陰るものです。ところが、イエスの放たれた栄光は放射する栄光。反射ではなくて、放射する栄光。これは太陽のような光です。事実イエスは「わたしは世の光です。」とおっしゃいました。

そして次に**マタイの福音書 17:3**に戻って頂いて、そこに今お話ししたモーセのことが出ています。『しかも、モーセとエリヤが現われてイエスと話し合っているのではないか。』これも驚くべき奇跡です。モーセというのはイエスと同時代の人ではありません。これは旧約聖書の時代の人で、少なくともイエスが生まれる前の **B.C.(Before Christ)1500年**とか **1300年**の間に生きた人ですから、考えられないような出来事です。過去の時代の英雄がここに姿を現しています。で、もう1人のエリヤという人物。モーセは律法を代表する、律法と言うのはユダヤ教の掟になります。特に聖書で律法と言う時には、**創世記**から始まる『**モーセ五書**』と呼ばれるものです。**創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記**。これはモーセが編纂したということで、それを律法と言います。一方でエリヤは預言者を代表する者として有名であります。旧約聖書は、律法と預言者という2つの言葉でも集約されるので、この律法と預言者を代表する2人が登場したという事は、これは旧約聖書の代表だというふうに見ることができます。モーセは律法の代表、そしてエリヤは預言者の代表。で、そこにイエスも居合わせるわけですが、ではイエスは何の代表なのかというと、勿論イエスはモーセやエリヤと同格ではありません。モーセやエリヤは人間に過ぎませんが、イエスは人となられた神であります。で、イエスは何のために天から降りてきて、人間の姿をとられたのか。それはこの律法と預言を成就するためです。ですからイエスは律法と預言の成就者と見ることができます。または完了者と表現できます。

で、この3者が話し合っていると**3節**にありますけれども、じゃあ何を話し合っていたのか。ここからは読み取れませんが、並行記事の**ルカの福音書 9:31**で、この3者が何を話していたのかということが記録されています。このモーセ、エリヤ、イエスの3者会談の議題は何であったのか、内容は何だったのか。**ルカの福音書 9:31**では『**栄光のうちに現われて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。**』とあります。“**イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期**”とあります。ここだけ見れば、エルサレムで最期、これは十字架刑の死を勿論指すというふうに見るわけですが、この“**ご最期**”と言う原語は、新約聖書はギリシャ語で書かれているので、ギリシャ語で紹介すると、それは“**エクソダス**”と言います。“**エクソダス**”というのは実はギリシャ語訳の旧約聖書の出エジプト記の書名でもあります。英語の聖書でもこれをそのまま踏襲しています。出エジプト記を英語で“**Exodus**”と言いますが、これはギリシャ語から来ております。意味は単に“**脱出**”、“**脱出する**”ということ。実際に出エジプトと言うのは、エジプトを脱出する。当時、モーセの時代、今から**3500年**程前、古代エジプトは世界最強の国でありました。そこからイスラエルの民が脱出する。それが出エジプト記であります。ですからこの“**エクソダス**”というのは、出エジプトも連想できます。実際にイエス・

キリストは、モーセのように、モーセの如く、まるで第二のモーセのようにして、十字架上で第二の出エジプトなるものを完成されるお方です。聖書でエジプトはこの世のシンボル。“この世”というのは、イエス・キリストを信じない罪の世界です。神を神としない、そのような世界を聖書はエジプトとよく表現します。そのような罪の世界から私たちを脱出させて下さるリーダー、モーセという名前の意味はちなみに“引き出す”という意味です。そこから引き出してくれるのは、イエス・キリストであると。実際に、モーセのような預言者こそが来たるべき約束のメシヤ、救い主であるということも旧約聖書に預言されております。これはモーセの書いた申命記 18:15 にある預言です。これもお読みしますので聞いて下さい。『あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない。』です。これはモーセの言葉ですが、「私のようなひとりの預言者」これはモーセのような預言者ということで、イエスの登場までそのような預言者は1人も現れませんでした。ですからこれは、実は第二の出エジプトを実現する第二のモーセ、それがまさにイエスだと言うことであります。“エルサレムで遂げようとしておられるご最期”、“エクソダス”について話し合っていました。

で、次に4節。『すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、素晴らしいことです。(本当に素晴らしいことだと思います。アーメンです。アーメンというのは、本当にその通りです、真実です、という意味ですけれども、確かにイエスと、モーセと、エリヤ。それを目の前で見ていると、もうここは素晴らしい、これ以上に素晴らしいところはこの地上にはないと、ペテロが言うのも無理はありません。で、そこでペテロが口走った事は、)もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。』幕屋というのは、仮の住まいです。これはテントのようなものです。で、それをモーセのために、エリヤのために、そしてイエス・キリストのために、ここで造るといふふうについペテロは口走ってしまったわけですが、あまりにも素晴らしい神々しい体験をして、ペテロは興奮のあまり何も考えずにこの様なことを口走ってしまいました。ただ幕屋を造る、テントを造るといふ事は、いつまでもここに居たいという気持ちも表しております。あまりにも素晴らしいので、もうここを離れたくない。ここで暮らしましょうと。そういう感じですね。皆さんもひょっとしたらここで素晴らしい体験をして、この長野クリスチャンセンターで寝袋を持って、もう家に帰りたくない。ここに寝泊まりさせてもらいたいと思う方もいるかもしれません。そう思う方は、ここでイエス・キリストに出会っている人です。

まあ、ここでもう一つ覚えて欲しい事は、人間は弱いもので、ついこのような神秘的な体験をするとそれをやたらめったら記念にしたがると。すぐにモニュメント、メモリアル、記念碑といったものを、自分の体験を形に残そうとする。これが人間の癖というか、傾向であります。それは私たちの弱さでもあると思います。ついついそのような素晴らしい体験を形に残そうとして、そのこと自体悪くはないですけども、ただその目に見えるものに頼りを置こうとしてしまう。それはともすれば偶像礼拝にもなりかねません。

で、もう一つの並行記事でマルコ 9:6 ではこのように述べています。この場面で『**実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。**』これが真実です。あまりにも素晴らしくて、でもこれは普通じゃない体験なので、ちょっと怖くもあったわけですね。「言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれた」とあります。つまり、気が動転したということです。

“言うべきこと”と。何も言わなくてもいいのに、ペテロは性格上何か言わなければ気が済まないタイプです。結構そういう人はいますね。何か言わないと、大体大阪人ですね。何か言わないと、黙ってられない。そういう性格、性分、これはペテロであります。

で、5節の方に目を移して欲しいと思います。『**彼がまだ話している間に**(もう訳の分からないことを並

べたてているんですが、でもそこに止めが入りました。彼がまだ話しいる間に)、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声でした。』この天からの声は勿論イエスの父、父なる神と呼ばれるお方です。明らかにイエスはただの人間ではない、神のひとり子であるということです。モーセやエリヤと並ぶような偉人ではない、聖人ではない、宗教家ではない、道徳の教師ではない。イエスは神であるということがここに証明されました。ペテロは性格上いろいろなことを口走ってしまうという事は、冒頭でも文脈の話の中で見ました。16章のところで、思わずペテロはイエスをいさめようとして言ったわけですが、でもそのペテロの発言に対してイエスは「引き下がれ、サタン。」というふうに叱責をするわけですが、今度は父なる神様の方で「ペテロよ、黙って聞きなさい。」と。で、このイエスに対する神様の言葉というのは、イエスが水のバプテスマを受けたとき、洗礼を受けた時にも天からした声でもありました。全く同じメッセージです。洗礼の時もイエスは、この天からの声を受けたわけですが、ここでも同じ父の声を聞くことになります。父がイエスを神の御子として、キリスト、救い主として承認されたということです。

で、今度は6節の方です。目を移して頂きたいと思います。『弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。』確かにあなたもここに居合わせたら怖がると思います。神の声が直接耳に入るわけです。聖なる神の臨在が突如あなたを包むわけです。罪汚れたものは聖なる神を前にしてはととても立ちえまません。汚れたものは聖なる神の前では立ちえないだけではありません。完全に消滅してしまいます。太陽に近づけばその高熱ですべて消滅してしまうように、ここできつとペテロ、ヤコブ、ヨハネは、もう自分たちは死ぬんだと。もう死も覚悟したと思います。

ところが7節を見て頂くと『すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない。」と言われた。』これが私たちの救い主です。確かに神の言葉は私たちの心に突き刺さり、そして私たちが怯ませます。あまりにも的を射ているので、「その通りです。私は罪人です。聖書に書かれている通りのものです。」でもそこにイエス・キリストが与えられました。イエスは神の御子、そして神の言葉でもあります。その方が人の姿をとってこの地上に来て、そして罪人に触れる方となって下さいました。人と神との間を取り継ぐことのできるお方。いわゆる仲介者。聖書ではもう一つ大祭司という称号もイエスには与えられております。それは“キリスト”というタイトルでもあります。“キリスト”というのは、“油注がれた者”という意味です。“油注がれた者”とは聖書では、預言者、大祭司、王様です。この3職を全て兼ね備えるのがひとりだけおられた。これが、ナザレのイエスであったということが聖書で言われているところです。で、その中でも特に大祭司というのは、神と人との間を取次ぐ、とりなす存在です。まさにイエスはここで父なる神と、そして怯え切っている弟子たちとの間に入って、取次いで「起きなさい。こわがることはない。」直接彼らの手に触れることができたのは、彼らと同じ人の姿をとって来られたからです。素晴らしいことです。私たちは聖なる神の前では、見えない神の前では、ととても立ちえまません。どうしたら良いかも分かりません。ただうろたえるばかり。そして申し開きも出来ない。言い訳も出来ない。自分の罪に打ちひしがれて、「もう私はこのまま死んだらきっと地獄に行くんだらうな。」でもあなたは一生懸命自分に言い聞かせようとします。「いや私はいろんな人に親切にしてきた。社会の役に立ってきた。だから地獄には行かないだらう。人殺しもしていないし、天国に行けるだらう。」でもそこには確信がないと思います。それは希望的観測です。誰もが天国に行きたいと思いますが、でも断言はできません。でも、イエス・キリストはそんな私たちのためにこの世に来て、そして「間違いなくあなたは神の国に入る。天国に行けるんだ。」と。それはイエス・キリストが、私たちがどうにもならないその罪の問題、言い知れぬ罪悪感、虚しさ。そして死の恐怖、不安。それらを全て取り去って下さるために、この世に来てくださった救い主です。この方だけが私たちの手に触れるだけでなく、その心にも触れることができます。

で、そのイエスが今私たちのためにも近づいて来て下さって、直接あなたに触れて下さいます。怖がる事はありません。恐れる事はありません。このイエス・キリストが今も生きておられて、あなたに語りかけて、そしてあなたに触れて下さいます。

で、8節の方で『それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。』気がついてみたら、モーセとエリヤは消えて居なくなっていました。ペテロは先ほどは、イエスとモーセとエリヤ、この3人のために幕屋を設けようとしていました。3人に1人ずつということで、ペテロの目からはイエスもモーセもエリヤも同じような人たち、同列だ、同等だと見たわけです。でもここで神様はモーセとエリヤを視界から取ってしまいました。見えなくしたわけです。そこにいるのはイエスだけという状態に神様はなさいました。そしてイエスは、モーセとエリヤと比べるような存在ではないんだと。これは私の愛する子なんだと。神の御子であるというふうに言いました。これは私たちの信仰のカギでもあります。どうしても私たちはモーセに頼りたくなります。モーセというのは律法の代表だと言いました。律法というのは所謂ルールです。私たちはいろいろなルール、規定を作って、そしてそれに従おうとします。で、それに従うことで、自分は善良な市民である、模範的な学生である、良い人だと。法律を破っていないし。それが私たちの傾向であります。で、エリヤにも私たちは頼ろうとします。エリヤというのは預言者の代表であると言いました。特に多くの人たちは、今は世の終わりであると。最近では世界中で本当に異常な現象が起きています。それはまさに天変地異のようなもの。これまで考えられなかったような災害が、異常気象が起きています。世の終わりじゃないかと恐れる人たちがいます。そのような所謂世の終わりの予言、終末予言といったものにも人々は興味を示して、それをいろいろな題材とした書き物、映画などもできて話題にもなるわけですが、そういったものに人々は囚われやすいです。ノストラダムスの大予言だとか、よく流行りましたけれども。でも、そのような私たちの傾向をよく知っておられる神様は、今、目の前からモーセとエリヤを見えなくして、そしてイエスだけが見えるようにして下さいます。これが私たちの信仰のカギです。傾向として私たちはモーセのその律法、ルール。そしてエリヤの預言、特に世の終わりの予言などに振り回されやすい私たち。そんな私たちを解放して下さい、御子だけに、イエスだけに目を置くように、フォーカスを置くように。これがブレない、揺るがない信仰のカギであります。「イエスを見なさい。」これが神様のメッセージでもありました。

で、最後にまとめたいことなんですけれども、この『山上の変貌』、中には「私には何の関係もないような話でした。私とは何の接点もありませんでした。」とがっかりした人もいるかもしれませんが、ひとつにはいくつかのレッスンがここにありますけれども、そのうちの1つをまずご紹介したいと思います。これは私たちが死んだ後どうなるのかということを示す物語でもあったということです。この『山上の変貌』。英語では”Transfiguration”と変貌のことを言います。私たちがこれからどうなるのか、特に死んだ後どうなるのかを教える箇所でもあります。で、これについては**第二コリント 3:18**を見て頂くと、死んだ後私たちはどうなるのかということが書いてあります。『**私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。**』イエス・キリストを信じる者は、イエスと同じ姿に変えられる。で、これはまさに変貌の姿です。光り輝く者に変えられます。

で、もう1つのレッスンとして、ペテロはモーセとエリヤを初対面であったにもかかわらずすぐに判別できました。モーセとエリヤはそこでネームプレートか何かを着けていて、大きくモーセとかエリヤとか書いてあって、ペテロが一目瞭然と判別できたという話ではありません。又はイエスがその前に「ここでご紹介します。ペテロさん、ここにモーセさんがいます。ここにエリヤさんがいます。」と、そのような自己紹介を互いに交わしたというような記事もここには書いてありません。むしろ1発で、パッと見ただけで、これがモーセだ。自分たちの時代からすれば、1000年以上も前の人たち。モーセとエリヤをひと目見

てそれだと分かる。これは実際には天国において私たちはイエス・キリストを信じる所謂クリスチャンたちと再会する素晴らしい恵みが与えられておりますけれども、その時には私たちはネームタグ、ネームプレートは不要であるということです。自己紹介も不要です。天国に行ったら、もうパッと見ただけでこの人と、会ったことのない人でもすぐ分かる。素晴らしいこれは期待のできる、希望にあふれる話です。世界中にはたくさんのクリスチャンたちがおります。会ったこともない人たちがいます。既に天に召された者たちもおります。その彼らと会うことができます。ついこないだ天に召されて行った Y ちゃんの叔父さん。その叔父さんを私は見たことがありません。名前だけしか知りません。顔も写真も見ただけではありません。でも天国に行ったら私はすぐに分かります。「H さん、わかりました。あなたですね。」と。「私たちはあなたのために祈りましたよ。」と。そのことを天国で私たちは楽しみに、その再会の時にいろいろな事を分かち合える。だから、クリスチャンは死ぬこともまた楽しみである。ワクワクしてなりません。

で、もうひとつ、3 つ目として、この『**山上の変貌**』から教えられることというのは、イエスはここでその姿が光り輝いたとあります。それは何を意味するかというと、人としては罪を犯すことがなく生涯を全うされたということを意味しております。同じ、私たちと全く同じ人生を送りながらも、同じ肉体を持ちながらも、罪なき人生を送られたということを指しております。もっと言えば、あなたもイエスと同じように罪を全く犯さなければ、変貌すると言っているわけです。輝くと言っているわけです。勿論イエスはこのヘルモン山の山頂からそのまま天国に上ることもできました。でもこの後イエスはこの山を降りて、そしてもうひとつの山、それはカルバリの山、ゴルゴダの丘というところに行って、十字架に掛かって死にます。で、その死は自分の罪のためではありません。私たちの罪を背負うためです。

で、もうひとつ。これは目撃者のペテロの言葉ですけれども**第二ペテロ 1:14~19**。ここにその『**山上の変貌**』の記事がペテロの記録として残っています。『<sup>14</sup>それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはっきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。(幕屋というのは象徴的に肉体のことを指しています。死に行く体、朽ち行く体です。)<sup>15</sup>また、私の去った後に(去るといふのは、この世を去るといふことです。)、あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです。<sup>16</sup>私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。<sup>17</sup>キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」<sup>18</sup>私たちは聖なる山で(これがヘルモン山です。山上の変貌のことです。)主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。<sup>19</sup>また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。』ここでイエス・キリストの『**山上の変貌**』の出来事をペテロが思い起こして証言している箇所でもあります。そこでペテロが教えていることは、イエス・キリストはあの時と全く同じその威光、輝いた姿で、もう一度この世に戻って来られる。これも聖書の中の預言なんですから、それをペテロは確信を持って語っています。「私は見ました。イエスの本当の姿を、本当の正体を、あの高い山の上で。そのお方はただの人ではない。ただの聖人ではない。この方は神として約束通りもう一度この世に戻って来られる。」これが来臨というふうにも使われている言葉でもあります。聖書にはイエス・キリストがこの世に戻って来られる、ということも書いてあります。

で、この世に戻って来られる時には、この世を救うためではなくて、この世を裁くために戻って来られます。2000 年前に、クリスマスに、イエスがこの世に来られたのは、この世を救うためでありました。でも 2 回目は、この世を裁くためでありました。そのことも聖書に預言されているので、ペテロは「私は確信を持っています。私はその威光の目撃者ですから、必ずイエスは約束通りに戻って来られる。」と、強調し

たわけです。

で、大体そういったことを『**山上の変貌**』という記事から私たちは教えられるわけですが、もうひとつだけこれは皆さんにとっては非常に実践的な内容になると思います。この“**変貌**”という言葉、“**メタルフォー**”というギリシャ語は、新約聖書中では4回しか使われておりません。これについても皆さんにお配りしている週報にも記してあります。“**メタルフォー**”、“**変貌**”、“**変容**”又は、生物学用語で言うところの“**変体**”というものです。で、この4つのうちの2つは、**マタイ 17章**と**マルコ 9章**、この『**山上の変貌**』のところに使われております。その箇所も週報に書いてありますから確認してみてください。

でも、あと残りの2つ、全部で4回ですから半分はイエス・キリストの変貌について。でも残りの半分はイエスの変貌ではなくて、実はイエス・キリストを信じる者たちの、すなわち私たちの変貌についての用例であります。ペテロはイエスが光り輝いた姿を見て、「これは素晴らしい。私たちは素晴らしいところに居る。是非ここにテントを張って滞在したい。もうここから離れたくないです。」と言いました。イエスの姿があまりにも素晴らしかったからです。素晴らしい体験をしたからです。この人と一緒に居ると素晴らしい。ここに居ることは素晴らしい。もう私たちはここから離れたくないですと。実はこのことはあなたにも起こるといふ話を最後にしてまとめたいと思います。

イエス・キリストを信じる者も変貌するんです。そしてあなたの周囲の人たちはペテロと同じように言ってくれるでしょうか。「ここにいることは素晴らしい。あなたのそばにいることは素晴らしい。あなたと一緒に暮らすことは大変素晴らしい。私はもう離れたくありません。」あなたの子供はそうしてくれるでしょうか。「お父さんの子供として生まれて、お母さんの子供として生まれて、こんなに素晴らしいことはない。こんなに嬉しいことはない。」と、あなたの子供なり、又は孫はそうしてくれるでしょうか。又はあなたの友達はどうしてくれるでしょうか。「あなたと一緒にいることは素晴らしい。」又はあなたの妻はどうしてくれるでしょうか。「あなたが帰ってくるのを待ちに待っていました。もう待ちきれませんでした。」夫の帰宅を待っている妻。「あなたと一緒に暮らすのは、こんなに素晴らしいことはない。」それともあなたの妻はあなたが帰ってきた途端に「ちょっと買い物に行ってくる。」とか、「もう夕食は用意してあるから、どうぞ勝手に。」そそくさと自分の部屋に下がってしまうでしょうか。引きこもってしまうでしょうか。是非考えて欲しいと思います。

先ほど**第二コリント 3:18**を読みしましたが、その中に“**メタルフォー**”が使われています。そこは『**栄光から栄光へと、私たちは主と同じかたちに姿を変えられる。**』と。『**これは、主なる御霊の働きによる。**』というふうに先ほど読みました。私たちもまた栄光から栄光へと、主と同じ、イエスと同じかたちに姿を**変えられる**。その“**変えられる**”という部分が“**メタルフォー**”であります。

で、その時にモーセとの対比もその前後を読んで頂くと書いてありました。モーセは律法の代表で、そのモーセの顔も輝いたんです。一時的ではありましたが、ましてやモーセの律法ではなくて、主の御霊、聖霊の働き。これは神の恵みでもあります。恵みと律法は相反するものです。そして律法と聖霊、これも相反するものですが、その律法ですら一時的な素晴らしい輝きを与えたのであるならば、神の恵みは、神の御霊はもっと素晴らしい輝きをもたらしてくれる。そのようにパウロは言って、そして最後に「あなた方は栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていきます。」と。その時には御顔の覆いが取りのけられると。イエスと顔と顔を合わせる日がやってくるんだというふうにパウロは言いました。そこに“**メタルフォー**”が使われております。で、それはあなたの努力ではなくて、主の御霊の働きであると。これは聖霊の働きだということです。聖霊が心に満ちると、イエス・キリストの姿にイエスを信じる者たちも変えられていくという約束であります。

聖霊に満たされてイエスの姿に変えられる。これは素晴らしい話ですねと。「是非そのような体験をしたいです、あやかりたいです。でも、どうやったらいいんですか。具体的に教えて下さい。実際にはどうな

んですか。」そういう人のためにもう1カ所この“メタルフォー”が使われている箇所があります。これはローマ人への手紙 12：1～2に見られる言葉であります。『<sup>1</sup>そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。<sup>2</sup>この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。』この「変える」というところにギリシャ語の“メタルフォー”が使われております。すなわち変貌するということです。「心の一新」心というのは英語の聖書では“mind”と訳されていますが、まさにその言葉です。これは“思い”、“思索”、“考え”という言葉です。考えにおいて一新しなさい。そうするとあなたは変貌するということが書いてあります。「それでも全然ピンときません。何ですか、その「心の一新」というは。“思い”の“mind”の一新とは何ですか。そうすると変貌すると言われても、全然ピンときません。」と思うかもしれませんが、先ほどから話してきたことを総合してまとめてみますと、聖霊に満たされれば、あなた間違いなく聖霊によって働きを受けて、御子イエス・キリストの姿に変貌します。輝くようになります。誰もがあなたと一緒にいたいと願うようになります。

でもそのためには、あなたは心の一新によって自分を変えなくてははいけません。心の一新、マインドの一新です。考え方の一新。これについては、これも聖書の箇所を皆さんにお伝えしますので、読み上げますから聞いて頂きたいと思えます。エペソ 5：17～25 というところに『<sup>17</sup>ですから、愚かにならないで、主のみこころは何であるかを、よく悟りなさい。(その後重要なキーワードがあります。)<sup>18</sup> また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。(聖霊に満たされることと酒に酔うこと。これが対比させられています。)<sup>20</sup> いつでも、すべてのことについて、私たちの主イエス・キリストの名によって父なる神に感謝しなさい。<sup>21</sup> キリストを恐れ尊んで、互いに従いなさい。<sup>22</sup> 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。<sup>25</sup> 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。』で、又6章の方にも続きがあります。『<sup>1</sup>子どもたちよ。主にあつて両親に従いなさい。これは正しいことだからです。<sup>4</sup> 父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。<sup>5</sup> 奴隷たちよ。(今日で言うところの従業員です。)あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。<sup>9</sup> 主人たちよ。あなたがたも、奴隷に対して同じようにふるまいなさい。(雇用主です。)おどすことはやめなさい。あなたがたは、彼らとあなたがたの主が天におられ、主は人を差別されることがないことを知っているのですから。』聖霊に満たされると、今読んだようなことが起こります。これが聖霊に満たされると、あなたの姿が光り輝くようになるということです。つまり先程読んだように、聖霊に満たされると勿論酒に酔うことはなくなりますけれども、それ以上にあなたはたとえば5章19節にあるように、詩と賛美と霊の歌とをもって、互いに語り、そして心から主に向かって賛美をささげるようになります。又はいつでも父なる神の御名において感謝するようになります。そしてキリストを恐れ尊んで、互いに従う、従順な人になります。いつでも不平不満ばかりもらして、文句ばかりたれて、いつも何か満たされていないような、機嫌悪そうなそんな状態から脱します。で、当然妻たちは夫を尊敬して従うようになります。で、夫たちは妻を命がけで愛するようになります。聖霊に満たされるとこういうことが起こります。又、子供は親に従う。親は子供を怒らせない。そして従業員との関係も良好になります。これらが全て聖霊によって満たされること、すなわちキリストの似姿に変えられる、変貌する。これが所謂輝くということです。

で、実はそれでもまだ聖霊によって満たされるなんていうことは一体何のことかよく分かりません。そのためにもう1カ所開かなくてはならない箇所があります。コロサイ 3：16～22、ならびに 4：1。『<sup>16</sup>キ

リストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。<sup>17</sup> あなたがたのすることは、ことばによると行ないによるとを問わず、すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい。<sup>18</sup> 妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。<sup>19</sup> 夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たってはいけません。<sup>20</sup> 子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。<sup>21</sup> 父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。<sup>22</sup> 奴隷たちよ。すべてのことについて、地上の主人に従いなさい。』まだ続きもありますけれども、ほとんど今読んだと同じ内容です。ただ決定的な違いは、**3:16**には「**キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませる。**」先程読んだ**エペソ 5:18**では『**御霊に満たされなさい。**』御霊に満たされた結果、夫婦関係も良くなる。親子関係も良くなる。そして会社での職場の関係も良くなる。結果が伴います。その一方でコロサイの方では、御霊に満たされるのではなく、『**キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませなさい。**』でも結果は全く同じです。つまり聖霊によって満たされるという事は、キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませるということの意味をしています。これが実は、心の一新によって自分自身を変えなさい、変貌させなさい、という意味であります。ですから、「聖霊によって満たされるというのは何となく神秘的でちょっとよく掴みどころがなくて分かりにくいです。」と言う人にも、聖霊によって満たされるとは、又はイエス・キリストをオープンフェイスで、顔の覆いをとりのけられて直に見つめるとはどういうことなのか。それは、キリストの言葉をあなた方の心に豊かに住ませる。聖書の言葉を通してイエス・キリストを知って、イエスに出会うということです。これは、心の一新によって自分を変えるという意味でもあります。イエス・キリストも**ヨハネの福音書 6:63**というところで、『**わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。**』と言いました。ことばと霊。これは切っても切り離せない関係にあります。聖霊が神の言葉である聖書を書きました。

ですから、最後に皆さんにお伝えしたい事は、あなたも聖霊によって満たされて、すなわちキリストの言葉を心の内に豊かに住ませることで、キリストと同じ姿に輝くようになります。で、そのような輝くあなたのそばには、誰もが一緒に居たいと願うようになります。「あなたとは一緒に居たくありません。そんなイライラしているあなたとは。」とか、又は「すぐにブチ切れて」とか、「いつまでもメソメソして」とか、「そんなあなたとは一緒に居たくありません。いつまでも不平不満ばかり言って、恨み辛みばかり言って、苦苦しい思いを持って、怒りや憎しみ、それに満ちているあなたとは一緒に居たくありません。」又は過去のことでいつまでも引きずって「あーでもないこーでもない。あーしなければよかった、こうしなければよかった。」後悔ばかりや、そして人を許せないような思い。そういう人とあなたは一緒に居たくないと思います。

ところが、キリストの言葉をこのように学び、そしてペテロとヨハネとヤコブのように高い山でイエスとの時間を一緒に過ごすようになりますと、あなたの顔は変わってきます。単に脂性で光り輝くという意味ではありません。クリーム塗り過ぎという意味ではありません。化粧の厚化粧だということではなくて、むしろ本当にあなたの内面から変貌していくんです。このことを皆さんにチャレンジしたいと思います。あなたもそうなりたいと思うでしょうし、周りの人もあなたにそうならんことを願っています。

「ここにいることは素晴らしいです。あなたと一緒に暮らす事は素晴らしいです。」まあ、そのように私たちも生きていきたいと思います。そのためには是非聖霊によって満たされて下さい。聖霊によって満たされるという事は、今のようにキリストの御言葉を心のうちに豊かに住ませることです。聖書の学びに時間を費やして下さい。ただの勉強ではありません。イエス・キリストを人格的に知る、そのような時間がありますから、そのためにイエスは二日間も祈りにささげられました。ですから是非そのことを皆さんも価値あることとして祈り求めて下さい。イエスが2日祈られたのであれば皆さんはもっと祈らなければい

けないかもしれませんが、いずれにしてもイエス・キリストを見る事はあなたに許されております。イエスはあなたに触れて下さいます。で、あなたはこのイエスを聖書の言葉を通して個人的に知ることができます。で、それは素晴らしい祝福をもたらします。素晴らしい効果、結果をもたらします。あなたは、もう不平不満を言わない人になります。いつもニコニコしていて、そして人にどんなに理不尽な扱いを受けても、あなたはいつまでも恨み辛みを抱えたまま、苦しい思いを抱えたまま「いつか仕返ししてやる。いつか見返してやる。」とか、そのように思わなくなります。赦すことができます。愛することができます。是非そのような変貌をあなたにも遂げてもらいたいと思います。栄光から栄光へと。すぐには、瞬間的にはイエスと同じようには変わらないかもしれませんが。でも、栄光から栄光へと。徐々にかもしれません。時間がかかるかもしれませんが。それでもあなたが御言葉にとどまる時に、聖書の御言葉を常に学んで、そこで時間を過ごす。それが肝要であります。ですから、いつまでも光り輝かないという人は多分、十中八九と言って良いと思いますが、聖書はろくに読まない人だと思います。で、読む中でも機械的になってしまっ、イエスをそのように知るといふ学ば方はしていないと思います。是非チャレンジしたいと思いますので、もっともっと時間をイエスと過ごして下さい。もっともっと聖書の学ばに本気になって自分の労力のすべてをそこに注いで頂きたいと思います。そうすればあなたは変わります。そうすればあなたは変貌します。間違いありません。これは聖書の約束です。では今日はこれで終わりたいと思います。